

〔翻 訳〕

仁 顕 王 后 伝 (上)

作者 未 詳

梅 山 秀 幸 訳

朝鮮国、肅宗大王の継妃である仁顕王后閔氏の本籍地は驪興、行兵曹判書の驪陽府院君屯村の女子であり、領議政宗同春先生の外孫でいらっしやった。

母の夫人宋氏が不思議な夢を見て、丁未の年(1667)四月二十三日に誕生なされたが、そのとき、屋敷の上には瑞気がのほり、産室には芳香がたちこめて、しばらく去らなかつた。父母はそのことの機微を知っていて、家中のものたちにけつて口外しないよう命じた。

ようやく成長するにおよんで、その姿がたおやかですぐれていること、まさに花も月も恥じ入らんばかりで、美しい顔が光りかがやくさまは燦爛として、白日が光を失わんばかり、古今にくらべるものとなつた。刺繡や裁縫がたくみですばやくこなされ、まるで百の神霊が教えたかのようであつたが、いささかもそれを顔色に出して誇ることもなかつた。惟精惟一として肅然と心になにも含むところがなく、まったく邪念がおありでなかつた。おおらかな聖徳をもって柔和でいらつしやるさまが少しも不自然でなく、徳行、礼節ともにすぐれていらつしやつた。孝と義の徳が特別にそなわり、しとやかで貞節をもつぱらになさる。心が公正で態度も立派であり、度量が広く、百行を具備していらつしやつた。日がな一日、端座なさいていると、なごやかな風と縁起のよい雲とがその玉体をとるかこみ、その端正で落ち着いた様子はまぶしくて人がよく仰ぎ見ることができないほどであつた。清く美しい姿態はかぐわしい秋のさざ波と高い空のようで、け高く、まっすぐな操はまるで金玉か松栢のようであつた。幼いときから諧謔と華美とを好まれず、紅い唇だけが鮮やかで、無色の衣袴を身に付けるだけでも、美しい姿態は常のものではなくすばらしく、百枝に秀でていらつしやつた。文筆にありあまる才能をお持ちで、万古

歴代のものに知らず、通ぜずということがなかったが、だからといって、もっともらしく取り澄まして筆を執って文章を書くということにはなさらなかった。父母や伯叔父のこれを受することはなほだしく、遠近の親戚は驚き、感嘆して交わり、早くも幼児のころから、尊敬しない者はなく、花のように美しい名が世間に鳴りひびいたのであった。

日常お使いになる手洗い水にも虹が輝くほどで、父の関公はこの女子が必ず高位に昇ることを推量し、心中に念じて、あらゆることがらにねんごろに教訓を与えた。伯父の老峯関先生承学大道も厳正なる誠をもってお后を愛されたことは、すべての子姪の中で一番で、いつも、

「澄み過ぎる水は鬼神がきらう。この児があまりにかしこく、美しいだけに、短命なのではないかと心配だ」

と語っておられた。

早く母夫人が亡くなり、心は痛み、哀しみは深かったが、歳月が経ち、喪礼のすべてを終えると、継母の趙氏に仕えるのに誠実であった。外祖父の同春先生がこれをいとおしく感じて引き取り、みずからの膝下に置き、静かに耳もとで、毎日のように

「おまえには妊姝の徳行がある」

とおっしゃった。そして、一族の学者たちの系統と貞節に生きた女たちの極まりのない徳行をお教えになった。万が一、お後の天性にかんばしからざるところがあったとしても、名声はおのずと高く、まして、山高くして玉を出し、海深くして苔を生ずのたとえのとおり、名家の門から聖人が生れるのは当然のことでもあったのだ。

庚甲の年（1680）の冬、仁敬王后がお亡くなりになり、王の母后は後の位が空しいことを御心配になり、后を選ぶ命令をお下しになって、世の淑徳なる女子をお探させになった。清風府院君金公がお後の徳行をくわしく聞いていたので、母后に奏上し、領議政宋先生もそれに付け加えて申し上げた。

「国母は万民の福でございます。当今、兵曹判書の関某の女兒の淑徳が並びないこと、わたくしもくわしく聞きおよんでおります。服喪中の天下は諸事慎んで、ことごとしいお后選びをおやめになり、御結婚を遂行なさいませ」

母后はおおいに悦んで、お手紙を書いて、命令して、後に立つようことこまかにおさとしになったが、関公はかしまって、ただちに上疏し、つとめて辞退するの

に心を尽くし、丁重であった。しかし、上意もすでに固まって、許されず、上疏にもかかわらず、ふたたび厳しい命令が下され、左議政の老峯閔公を呼びつけて、辞退が国体に不敬である旨を警告なさった。されば、臣子の道理として辞退できるものでもなく、宮廷を下がって、家に帰り、兄弟子姪のすべてが集まって、おそれ多い天恩に感謝して、涙がおのずと流れ落ちるのも気づかないようであった。

宮廷から宦官と宮女が使わされ、お后を於義洞の本宮でお世話することになった。宮女が王様の命を受けて、お后を仰ぎ見て驚き、敬服して、継母の府夫人に申し上げた。

「わたくしが天恩をこうむって宮廷に入ってからというもの、三代の王がそれぞれに淑徳なる婦人をお集めになり、八十人におよぶ方々を拝見しましたが、このような聖徳と容色をそなえた方は初めてでございます。これは国家と万民の万幸であって、われわれ宮人の長い宮仕えの栄華でもございます」

府夫人が思いもよらないことと謙遜する態度には礼儀がそなわっており、尚宮はそれをも嗟嘆して宮廷に帰り、見たままを申し上げた。母后はおおいに喜んで、吉日を日々待ちわびて、なかなかその日にならないのをお怨みになった。

ようやく吉日となり、閔公が威儀をととのえて婚礼を行ったとき、王様の御歳は二十一であった。王様がいかめしく威儀を尽くし、別宮にお渡りになり、玉床の鴻雁を結納としてさし出された。お后をお乗せしたお輿をせきたて、黄金の鳳輦をみずから閉ざして、内裏におもどりなさった。世子嬪の家礼とはひとときわ異なり、王が用いる龍や鳳凰をあしらった旗やのぼりに黄金の斧鉞を用い、万朝の百官が行列し、七宝で粧いをこらした宮女や侍女たちが大道を少しの隙間もなく十里の間に並んで、香りがたちこめ、風流の声が殿上に鳴りひびいた。その風流の雄壮華麗なこと、まことに讃仰を惜しみようのないものであった。

杯を交わす儀式は目を凝らすばかりで、お后の聖徳がその外貌におのずと現われ、まばゆい光はまるで明月が秋空に光るようであった。お后の、清らかな光彩が御殿に映え、金闕宝台も色を失い、お后ひとりであたかも千宮の宝物が光を発するようだったから、仁君はおおいに驚き、先代、先々代の両殿の大妃もはなはだ喜び、望みもようやくかなったことゆえ、お后を大切になさることこの上なかった。

この日、閔氏は王妃に冊封されて後の位に昇り、他の妃、嬪、公主、それに三百の宮女の朝賀をお受けになった。おだやかな陽ざしのもと、恵みの風がそよそよと吹き、縁起のよい雲が空にはたなびいて、宮廷にまさに太平国母が御着位になる何

よりの日よりであった。人心はおのずとやわらぎ、千万の臣民が欣悦した。

閔氏が后となって、先君のお后である二人の大妃に孝養をお尽くしになるありさまは、まさに出天の誠孝というべきで、玉をとるごとくうやうやしく、水に満ちた皿を奉ずるようであった。王を仰ぎ見て、内助を治め、徳をもって振る舞う御様子は柔順でありつつも、さっぱりとしていて、他の妃、嬪、宮女を治めるのには恩と威を並び行われる。善と悪、親と疎にとらわれずに人を愛される、そのなごやかな空気はまるで春の園で万物が生き返るようであった。礼節と法度は厳肅、かつ剛直であり、あえて仰ぎ見ることがためられるほどであり、宮廷中がその徳を讃嘆して礼度にけじめをつけた。そのため、閔氏が入内するや三、四日のうちに、教化はあまねくおよび、なごやかな空気のみなぎった。お二人の大妃も閔氏をはなはだ敬愛なさり、国家の福として祝われ、王もうやまって大切にかしづかれたので、朝野はいよいよ欽服した。お二人の大妃がお手紙を尤庵宋時烈に下され、中宮の聖徳を心からほめたたえ、御褒美を下賜された。府夫人に対しては格別に手厚く、恩栄に浴さしめなされたので、閔氏の家ではおおいに恐縮した。

癸亥の年（1683）の秋、王様が天然痘におなりになって、病勢がおもわしくなく、お后ははなはだ心配なされ、昼夜、帯を解くこともなく、まごころをもって看病なされた。大妃もまた禁身なされて、気が気でなく、お后とともに水ごりを取って後苑に壇を設け、昼夜みずからお祈りをなさる。お后は大妃の玉体がそこなわれるのを憂慮して、みずから代わって誠心で尽くされ、他にまかせるといことがなく、朝野でまごころを一つにして尽くしたので、蒼天が感動して徐々に救いをさしのかべ、王様は平復なされた。臣民がこれを慶ぶこと、たとえようもないほどであった。

大妃は王様が御病気のあいだ、心を悩まされることが多く、御苦労が絶えなかつたので、玉体をいささかそこなわれ、呻吟なさるようになり、しだいに病状が重くなっていかれた。王様とお后は御心配になって、昼夜おそばを離れず、号泣なさらないときはなかつた。大臣たちに命じて、宗廟社稷に祈らせ、詔書を下して、獄門を開かせ、罪人たちを赦免なされた。すべての御医たちに看護を分担させ、医薬を心をこめて投じ、効験のあらわれを心待ちにして、王様とお后は御心労のあまり、憔悴なされたので、臣民たちはそのことをまた心配に思うこと限りなかつた。

十二月五日、寅の時に、大妃は昌慶宮の儲承殿でお亡くなりになったが、このと

き春秋は四十二歳でいらっちゃった。臣民は呆然とし、宮中も驚惶として哭声が天にとどろいた。王様とお后がお哀しみになることも極まりなく、肉饌を召し上げらず、宮中の上下がその誠孝を嘆服した。三年の喪が終って、御魂屋をこわしたが、王様とお后がそのことをあらためてお哀しみになること、はなはだしいものがあった。

そのころ、宮人の張氏が侍婢として後宮に入り込み、禧嬪の号を授けられたが、行いがよこしまで、ずるがしこく立ち回って、王様の心にうまく取り入ったので、王様はこれをたいへん寵愛なさるようになった。

戊辰の年(1688)の正月、王様の春秋は三十におなりになった。御子の誕生という慶事を見ないのを気に病んで、お后は深く慮ばかって、日々、王様に告げて、誰かふさわしい女子を選んで子宝を得られるよう、おすすめに became。王様は始めはお聞き入れにならなかったが、お后が毎日のように熱心におすすめになり、わたくしごととき一女子の妊娠を待って、国家のまつりごとを軽んじてはならないと、ねんごろにおっしゃった。その高邁な徳と柔和な話しぶりにはまごころがこもっていた。王様はお后の態度に感嘆して、朝廷に妾を選ぶよう命令をお下しになった。妹の明安公主がこの命令のことを聞いて驚き、姑母の長公主をともなって参内して、王様とお后に朝見し、お后のお歳はまだ若く、もうしばらく懐胎を待って、早々に妾を選ぶべきではないと、熱心にお諫めになった。お后はおましに座って、顔色は晴々として、おっしゃった。

「わたしは徳がうすく微弱な性質でありながら後の位を汚し、昼夜、まるで薄氷を踏む思いで過ごし、王の盛徳に報いることができないのを憂慮しております。こうも徳うすく、王子の誕生がないようでは、どうして国のまつりごとを心配しないでおられましょう」

そういいおわって、顔色は変わらず、内も外も自若としていらっちゃったので、公主らは感服して、ふたたび諫めることはなく、互いに盛徳を称揚し合ったことであった。かくて王様とお后のいつくしみ合われること、未来永劫に絶えることはないようであった。

こうしてついに、淑儀の金氏を選んで後宮に入れ、お后が礼をもって応接し、恩恵を示して、徳をおよぼしになるさまは、いにしえの中国の太妊、太姒と異なることはなかった。宮中のものみながその徳行を記憶し、聖行をうわさし、嘆服しない

ものはなかったのだが、時運が悪く、お後の命運も天の定めるところであった。古くから紅顔薄命とはよくいったもので、聖人に災厄がふりかかるのを人力ではいかんともしがたい。何という意地の悪いことか、天道に疑心を抱かざるをえない。

この年の秋八月、仁祖大王妃が昌慶宮の内殿でお亡くなりになり、王様とお後は深く哀しみ、朝夕の供養のたびにお嘆きになることがはなはだしかった。

この年の冬十月、禧嬪の張氏が初めて王子を産んで、王の愛情はなみなみではなく、お后もおおいに悦び、可愛がり、おあやしになるさまは、まるで御自分のお腹をいためたお子のごようであった。張氏も自分の分というものをわきまえておれば仕合わせであったものを。ところが、たちまちよこしまな企みとわがままな心を生じ、お後の閔氏の盛徳と容色とが一國に秀でて、人望がみな集まっているのをねたみ、ひそかに後の大位をうかがった。そのみだりがましい逆心がいよいよつり、日々気配をうかがって、お后を讒訴して申し上げる。

「お后は新生の王子を毒殺なさろうとしている」

また、

「お后はわたくしを呪い殺そうとなさっている」

と、さまざまに謀り、計略をめぐらして、奸悪なる夫人たちと結托し、噂を流し、証拠をでっち上げて、王様のお耳に入り、お目に入るようにしたのであった。昔からこうした悪人にも、事の正邪など問題にせず、加担する者がいるものだ。お后についてよからぬ噂が盛んに流れ、王はようやく疑いを抱かれ、お后を早くも冷遇なさるようになった。張氏は妖悪にも手練手管を尽くして、王様のお心を迎え、王子を手なずけたので、いよいよその権勢は増していった。王様はしだいに頑迷におなりになって、黒白を弁別することができず、かつて厳正であった判断も減退していった。聖人君子たちを側近から遠ざけ、奸臣賊子を多く用いられるようになったので、朝廷がうち沈み、疑心が飛びかった。お后は心配して、張氏の人となりがいつか化けの皮がはがれることがあるのを知って、また王子がいかにも幼くていらっしやだったので、ことの成り行きを熟慮して、ここで辞されることなく、いっそうの淑徳と聖心でことに当られた。

己巳の年(1689)、驪陽府院君が亡くなった。お後の哀痛ははなはだしく、喪礼を行い、果実とお肉を召し上がることなく、杳然となさっていた。王様はすでに心に決断したことがあって、それを表明するまでもなく、世間は騒がしく、とかく噂し合った。

「お后が廢位になる」

四月二十三日はお後の誕生日であったので、各宮と内需司から貢上品の目録をさし上げたが、王様は目録をお受け取りにならなかった。また食べ物も召し上げられず、大臣と二品以上の者を引見して、廢妃の事をお命じになった。左承旨の李頤晩がそれはできないこととお諫めしたが、王様は身を震わしてお怒りになり、彼を罷免なさった。また、修撰の李萬元がその誤りであることをただしたので、王はますます怒って、彼を遠流にし、こうして大臣忠臣四十人あまりが辺地に流された。また、廢妃の命令書を下されたので、朝廷はことごとく驚いて、宮廷に集まって大赦を請うたが、その効果はなかった。

このとき、お后のお父上や伯父上そして従兄弟の方々は、それぞれ朝廷に立ち、世に居して、学問、道徳ならびに名望が高く、世評もかんばしかったが、お后が入内しても、事業を私して他に施すということがなかったで、それを期待していた小人は猜疑して、注目して、機会をうかがった。幸い、礼曹判書の閔氏などは政院で罪を晴らし、言葉を尽くして冤罪であることを訴え、大司憲の陸昌明は大赦を請うて、反対したが、奸臣たちの間言が盛んで、王様の意を迎え、あおるばかりであった。浮雲がおおって王様の目をふさいだので、忠臣の諫言はまったく効果がなかった。

このとき、応教の朴泰輔は罷職中であったが、まず第一には、聖上の失徳が心配である旨を述べ、次にはお後の盛徳を闇に葬ってしまうことを痛烈に駁した。罷職中の朝官たちみなとともに、いっしょに署名し、上疏して、お后を救おうと、判書の呉斗寅と参判の李世華が先頭に立ち、また応教の朴泰輔が代表となって申し上げた。

「仁君が后妃をもうけるのは祖先の正統を受けつぎ、すべての百姓の上に立って、永世を確保するための慶事です。今、王様は万民の父母となって、三綱五常の大切な法をもって、国家を治めなくてはならないのに、みずから道理を失うことをなさって、人民の望みの綱を断ち切ろうとなさっている。聖人が法を作り、妻女を重んじて五常に入れ、『書伝』の中でも、『ともに三年の喪を過ごした妻は離別しない』と述べております。王様もまたお后とともに三年の喪を経て、今また大妃の喪とともに服して、まだそれを終えられておりません。たとえまちがいがあっても、それを廃さないのが、むしろ立派な聖断であることを御理解ください。聖人も、『父母が愛するものは、たとえ犬馬であっても、大切にする』とい

っているではありませんか。明聖大妃においては、お后をはなはだお愛しになりました。王様の極まりない孝心をもって、どうしてかくも人倫を傷つけなかり、また大きな度量を持っておられながら、どうしてこうした失徳を行おうとなさるのか。伏してお願ひします。天下は百度熟慮し、人倫を定め、臣民の望みを汲まれたなら、どうして宗社と臣民の幸福とならないでしょうか。願わくは、聖上は廃妃の命令を撤回なさらんことを」

王は上疏文を読んで、おおいに怒り、ただちにみずから尋問なさることになり、三人をとらえ、厳しく問いつめられた。

「お前たちは臣子の道理に背き、君父を批判した。その罪状は実に三族におよぶものだ。悔いて、忠義の心を取りもどし、妃を廃することを承認しないか」

三人は頭を合わせて、すこしも屈することなく、ひたすら慷慨し、忠義の心が北斗と牽牛の星の間を貫くようであったので、王は身を震わせて怒り、邏卒に命じて、三木の刑具をそろえさせになった。三人を刑具に載せて、拷問を一度ずつ行ったが、叫び声が遠くまで響き、流血が浪籍たるさまであった。判書呉斗寅と李世華は齡七十を数えていたので、威風をただよわせてはいても、刑罰にこらえきれずに、頭を垂れ、言葉を発することができない。しかし、朴泰輔の精神はゆるがず、心は秋霜のよう。拷問を身体に受けて皮と肉とがちぎれ飛んだが、すこしも恐れることなく、ひときわ声を張り上げて申し上げる。

「父たる君が徳を失っても、子たる臣がそれを諫めず、君が妖婦の色香に迷わされ、罪のない国母を廃されたとすれば、これは千古にない大変事であり、国の風紀に関わります。わたくしはたとえ微力であっても、国の禄を食み、朝行に参礼しているかぎり、君が徳を失い、万代に汚名をお流しになるのを、どうして諫止せずいられましょう。伏してお願ひします。王様はどうか国母を讒訴する者の首をはね、慈悲深い御命令をお下しになるように。そうすれば、天下の福、生民の万幸、これに過ぎるものはありません」

王様はますます怒り、龍顔を上げ、龍床をたたいて大声を出し、ののしりになる。

「なんという、いやしく奸悪なやからなのだ。わたしを讒訴に迷う暗君といい、自身を直言する忠臣といいつのる。かくも大逆不道の者にこのような軽い刑では物足りない。膝に重しを重ねよ」

そうおっしゃったところ、泰輔も声をさらに大にして申し上げた。

「王様がわたくしを殺そうとなさっても、生命のあるかぎり、どうして父の失徳を諫めず、母の無罪を訴えずにいられましょう」

王様は怒りをおさえられず、膝の重しを加えさせ、釘のついた杖でなぐりつけさせになった。それは左右の者も目をそむけるほどで、皮肉がそげ落ちて骨があらわれ、噴き出す血が王様の上衣にまで飛び散ったが、泰輔の顔色はしっかりしており、すこしも苦しまなかった。日がすでに暮れかかろうとしていたが、泰輔は決して屈伏しようとしなない。王様はいらいらして、罪を責め続けておっしゃる。

「こやつは奸悪な毒物だ。火刑じゃ。焼き鑊^{こて}をあてよ」

庭前で火をたき、烙印が押される。肉の焼ける臭いがたちこめ、黒い血が地面にしたり落ちる。左右の者は顔を手でおおって、涙を禁じえない。侍臣たちもその場にいたたまれず、まるで厳冬でもあるかのように身震いしたが、泰輔はいささかも動ぜず剛直であり、壮として、なお忠臣烈士の風をくずさなかった。一身が硬直し、手も足も動かなくなって、王様は庭に降りてみて、心の内では感心に思い、終日終夜立ちたらしきになって、玉体に不安があり、疲労を感じて、承旨にお命じになった。

「お前たちが道理を聞かせて白状させ、獄に下せ」

そこで、承旨は王命を奉じて前に進み、しかりつけた。

「お前は無礼にもひたすら上意にそむき、こんなぎまだ。王様もわざわざ夜をふかして、玉体をわずらわされた」

その言葉も終らぬうちに、泰輔は目を怒らせ、声を励まし、おおいに叱りつけた。

「乱臣賊子めが空しく国の祿を食んで、仁君を正道におもどしすることもせず、阿諛追従するのみで、無罪の国母を廃すことに余念がない。のみならず、わたくしの非をいうが、これはまことに禽獣にも劣った夷狄の所行である。わたくしはたとえ死のうとも、いにしへの中国の龍逢・比干の類たらんと思うが、お前たちは生きて長らえようと国賊である。わたくしは死んで朽ち果て、鬼神になっても、災厄をお前たちの子孫におよぼそう」

承旨は無慚にも言葉がなく、退いたが、王様はふたたび考えなおして、お命じになった。

「獄に下し、明日には甲山に流せ」

罪状を審問する法廷を開くことなく、翌日すぐに出発して、道中一度も休むことなく甲山におもむいたが、お后がやはり諫争の甲斐もなく廃されたことを聞いて、

朴泰輔は声を失い、長く嘆息し、ついに杖毒と火毒が身体中に回って死んでしまった。まことに無慚、古来、忠臣烈士が死ぬことも多くあったが、泰輔の精忠ぶりは確かに龍逢・比干の後を襲うものであった。一時に美しい名が世間に伝わって、千秋万歳の後にも金石に掘られて残ったから、その名はけっして朽ちることはなかった。七十になる生家の父母がまだ存世だったから、はなはだ惨酷なことであった。泰輔の死を見て、都の士庶人で泣かないものはなく、奸臣、小人といえども嗟嘆した。

このとき、お后は父の府院君の喪の後も深く哀しんで、お身体も健康ではなかったが、左右の尚宮が廢位のことを聞いておおいに驚いて色を失い、泣きながら訪れたとき、いささかも顔色を変えないことなく、喟然として、嘆息しながら、おっしゃった。

「これもまた天数というもの。誰を恨むことがあろう。あなた方も瓶のように口を閉ざしなさい」

そういつて、晏然として動じられることはなかった。

このとき、明安公主は変を聞いておおいに驚き、長公主とともにさっそくに宮廷におもむき、王に朝見して、お後の宿徳が盛んで、讒言がいわれないものであることを告げ、お后が大王の大妃にうやうやしくお仕えされたことを奏された。涙が御座を濡らすまで、口を極めて諫め、忠言は激切であったが、王様は終始お聞き入れにならず、いかんともすることができず、公主は嘆息し、涙を流された。お后に目通りして、泣きむせびになるさまは悲愴で、袖をしばりながら、お言葉を発することもできないほどなので、むしろお后が嘆息して、おなぐさめになる。

「禍福は天にあって、わたくしのさきゆきも天数なので、ただ順守するだけのこと。誰も恨もうとは思いません。公主がこのようにわたくしの身の上を御案じくださるその恩恵はけっして忘れません」

公主はお後の言葉に嘆服して、おっしゃった。

「今は浮雲が王様のお心をおおってしまったが、聖上は本来賢明な方であり、いづれ後悔なさるであろう」

公主はとてもこらえきれず、お后をつかんで離さず、涙を連綿とお流しになる。無数の宮女たちがまた泣いて、とりすがったので、とてもお后は出発できない。だが、王命を軽んじることはできないので、ようやく出宮することになった。この

日、監察と尚宮が上意を受けて、寢殿に至って、お后を廃する旨の命令を報せると、お后は自然にお立ちになって、礼服を脱ぎ、かんざしを取り、中階に降りて、王命をかたじけなく賜わった。お后がそのまま宮廷を出て、御実家にもどろうとなさると、宮中がまたもや痛哭した。その哭声が狼籍としていたために、王様は聞いて大怒し、宮女を急に遣わして、

「さっさと出て行け」

とお伝えさせになった。わが朝鮮朝に入ってからこうしたことがなく、先例もなかったが急にお局に人をやり、

「他室のものに後の部屋を使わせよう」

とおっしゃった。このとき、宮女たちはまたかく権勢を慕い、恩寵を求めたがるもので、お後の形勢が寂しく、衰えていくにつれて、言葉づかいも放恣に、挙措も驕慢となって、すこしも敬意をはらうことなく、揚々と自得するようになったが、お后はそれに気づいても気づかぬふりをなさっていた。お後の左右に侍る宮女たちは憤懣やる方なかったが罪されるのを恐れてあえて言い出すこともできず、片隈に集まって、ひそかに涕泣して悲しむだけであった。一人の宮女が張氏の指図のままに、前に進み出て、お後の衣服を後に引っぱったところ、お后は文徳をそなえた方でまことに自然にほほえんで衣服を脱いで見せられ、雙顔で宮女を振り向かれる。すると、清らかな光が貫いて、人の五臓までを見透かすようで、氣象の厳正であること、まるで秋霜のようであった。宮女は面目なく、気づまりになって首をうなだれ、しりぞいたが、左右の者はひとしお胸をつまらせたことだった。王様のお怒りはなかなかやまず、早く出て行くよう催促なさったが、このとき、お局から新門の外に出て行くのに、わずかの婦人しか付き添わなかった。驕の行列もまったくとのわないのに、すでに耀金門を出ようとなさっているという話が伝わって、あわてて見送ろうという人々は白い布をかぶって顔をかくして出かけ、いちはやく景福堂の前に出て待っていた。お后が肩を落として轎子に上って耀金門を出ようとなさるとき、宮女七、八人が痛哭を始め、後に続く下僕たちもいっせいに泣き出したので、あたりは凄凉として、愁雲がただよい、天気もまた陰々として、悲しみをいやが上にも増した。その惨憺たる様子をまたどう形容すればいいだろう。先導の五十余人が耀金門の前につらなると、百余人が敦化門で待ちかまえ、上疏を聞いて号泣したが、お後の御出御を見て、驚きをあらたに大きくして、涙で袖をしぼりながら、百余人は安国洞の謫居までお送りした。悲しみの声が天地に震動し、百姓が男女とな

く道を埋めて慟哭し、市場の者も市をほったらかして泣き、草木禽獣がまたひとしく悲しんだ。愁雲が慘澹と市中を一色におおって、世間は光を失った。

王様はそうしたありさまを聞き、聖庁を幕で閉ざされた。人心を不快に思っ、それらのことを王様のお耳にお入れした小姓頭三人をつかまえ、遠くへ流しておしまになった。

お后が安国洞の謫居にお着きになると、母上の府夫人が迎えに出て、抱きつくやいなや痛哭し、お后も父上の府院君のありし日を想い出して、哀しみ、涙をお流しになる。お后が府夫人におっしゃる。

「罪人の身で親族とともに晏然と過ごすわけにはいきません。退出なさってください」

そうお願いなさるので、府夫人も泣く泣くしかたなく、阿峴洞のお宅におもどりになった。同日、お后は命じて、内外の門を封鎖させ、侍婢を一人も置かず、ただ宮女だけを置いて、正堂を廃して、下堂を居処とされた。宮女というのもお抱えの宮女で、三人の闕内宮女が規則を破ってまで付いて来たが、お后が、

「あなた方はもともと禁中の侍女です。それを、どうしてわたくしがみだりに使うことができようか。お帰りなさい」

とおっしゃると、三人は頭をふって、泣きながら申し上げる。

「賤しい身のわたくしどもは、一生かけたところでお後の御恩に報いることができません。どうして一時にせよ、お膝元から離れることができましょう。お后のもとで死にたいのです」

お后はその至誠に感動して、宮女たちをそのままにして置かれた。家は大きく、人は少いので、各部屋はがらんとして、封鎖されて、しんみりとして閑寂で、人跡もまったく途絶えてしまった。宮女たちは禁闕玉殿にあまり意をはらうこともなく繁華富貴を目のあたりにしていたことが今となっては悲しく、お后のおいたわしさがしのびがたく、わが身のつらさをかえりみることなく、お后至誠をもってお仕えた。悲しくていつも泣き出しそうであったが、お后が自然な姿で貞淑でいらっしゃるのを見て、哀しみをまぎらせるのであった。

このとき、お后の伯父の左議政の閔公も流され、従兄弟もまた配流されていたので、阿峴洞の家には母上の府夫人だけがいらっしゃった。朝夕の食事を阿峴洞から安国洞へ運ぶこと、七、八日が経過して、お后はまわりの者におっしゃった。

「食飯を食すことだにはばかられます。以後は乾物ですませることにしましょう」

宮中からというもの、一日に一種も進御がなく、左右の者はいっそう悲しみを深くした。親族が門外にやって来ることもなく、ただ来る者がいないだけでなく、もちろん出て行く者もない。

こうして、秋七月になって、御実家から松茸が送られてきたが、お后はそれを見て、急に愀然と顔色を変え、玉涙をお落としになった。宮女はいずまいを正して、おたずねした。

「お后はどのように危殆に瀕しても泰然としていらっしゃるのに、今日あらためてお悲しみになるというのは、いったいどうなさったことでしょう」

お后はため息をついておっしゃる。

「わたくしは今このような状態にあるが、白玉に傷がないのと同じく罪はなく、時運を恨むだけのこと。何を悲しむことがあります。ただ、わたくしが宮廷にあったとき、やはり本宅から松茸を送ってきたことがありました。そのときは、二人の大妃様にさし上げ、お食べになっていただくとお膳に供したのです。今日、松茸を見てそれを思い出し、自然と悲しまれるのです」

言葉とともに、お涙が玉顔を伝わって落ち、左右の者も泣き伏して、仰ぎ見ることもできなかつた。

窓も戸も破れ果て、四壁もつくろっていない。広い庭と築山の草もずっと刈られず、道も草が生い茂って、人跡もすっかり絶えてしまった。魍魎魍魎やその他もろもろの物の怪が、日が暮れるやいなや、まるで人が往来するのと同じように、現われ始めて、宮人たちは恐れおののき、身動きもできない。ある日、庭さきに突然大きな犬が入って来たが、その姿がはなはだ醜く、宮人が追い出しても、また入って来て、なかなか立ち去らない。そこで、お后が、

「その犬はどこから来たのか、入って来て、追っても追っても、出て行かない。不思議なことです。放って置きましょう」

とおっしゃった。宮人が食べ物を与えると、十日あまり後に仔犬が三匹生れ、大きな声で吠え立てる。それ以後というものは、日が暮れて、魍魎の火の玉と魍魎の気配が現われるやいなや、犬四匹がいっせいに吠え立てるので、雑鬼は急に引っ込み、犬たちがその跡を追いたてたため、魍魎魍魎はすっかり姿を消して、家中はようやく平安になった。だいたい無知な動物といえども恩を忘れないのに、人間につ

いてはどうであろうか。お后が廃されて後、朝廷にほくそ笑む小人が多かったが、これらは禽獣にも劣るというものである。

お后は天性が端正で重々しく、心に動揺されることなく、突然の風雨に襲われ雷鳴を聞いても、庁舎からただちに房中に入って、終日静かに閉じ籠っていらっしやるだけだった。ただ寂寥に耐えられず、兄君の閔正字の八歳の女児をお側置き、『小学』と『列女伝』を教え、裁縫を教えて、日をお暮しになった。身边が不如意で、荒れ果てたところで、もはや人をそしり、鬼神を恨むこともなく、天然自若としておられたので、左右の者はいっそう感服した。父上の府院君の三年の喪が明けたが、お后はさらに深く哀しみ、お身体もけっして安寧ではいらっしやらなかった。本宅でも彩服に着替えられることがなく、

「罪人がどうして彩服を着られましょう。衣服もふとんも木綿ですませるべきです」

とおっしゃって、その言葉のとおり、木綿のチマと白いチョゴリをしつらえ、木綿のふとんでお寝みになり、宝物と御馳走をお近づけにならなかった。

これより先に、王様がお后を廃して禧嬪の張氏を王妃に冊封し、後の位に即け、宮中で朝賀をお受けになった。宮中の者みなお后のことを思って悲しみ、張氏がみだりがわしい女であることを憂えたが、朝廷には今や人物も忠臣もなく、誰もあえて口をさしはさむことはなかった。みながひそかに憤りを抱き、涙をこらえ、朝賀を終えようかというとき、禧嬪の父を玉山府院君に封じ、兄の張希載を訓練大将に任じられることがあった。国中が驚き、あきれはて、法律と風紀が乱れたために、危亡に陥り、朝鮮全国八道の人心も千々に乱れ、紛々と風説が飛びかった。おおよそ昔から、いかに聖帝・明王といったところで、いちどは讒訴に迷うこともあるものだが、肅宗大王も文武を兼ねた名君であって、張氏にこのように親しんで、国政を混乱させてしまったのは、まことに無念なことであった。

この庚午の年(1690)に、張氏の産んだ男児を王世子に冊封した。張氏は揚々と自得し、傍若無人に振る舞って、こうして悪を現じようになり、他の妃嬪を排し、宮女たちを厳しく罰した。その耳をおおいたくなるような暴言と高慢な行いは形容のしようもないほどであった。

張希載は朝廷の外でみだりがましく振る舞って、陰険であり、全国に手下を派遣したので、あえて口をさしはさむ者もいなかった。

こうして、三、四年が過ぎ、天運があらたまって、苦が尽き、甘きが来たって、興が尽き、悲が来たる、ものごとにも変化があらうというもの。浮雲がしだいに消え去って、太陽が姿をあらわし、張氏への聖寵もしだいに尽き去り、閔後の冤罪であることがわかり、張氏の妖悪であることをさとって、王様は疑いをふつつと起こされた。王様の気配が以前と変わったので、小人と奸臣どもが、

「閔氏の三寸の叔父と甥どもをまた罪しましょう」

などと申し上げたが、王様はけっして許さず、こうして閔氏の一門は滅びることなく保たれた。

張氏はひそかに王様の御ところを推量して、おおいに恐れ、兄の希載とともに謀り、甲戌の年(1694)、ついにふたたび獄事を起こし、正しい者たちを殺し、お后を葉殺しようとして、変が出来た。王様はそのさまを見て、張氏の心根を見きわめ、はっきりと奸人の凶謀を理解なさった。即日、獄事を撤回して、佞臣を追い払い、昔の臣下をふたたび召して用いられた。甲戌の三月には大殿の別監が三度宮中を捜査して帰って来て、四月の初午の日に命令を下して、お后が無罪であることを明らかにした。お后を別宮にお迎えすることとし、封書を下し、尚宮の別監と宦官を遣わされたが、お后は辞退して、

「罪人がどうして門外の人と接し、御札を受け取れましょう」

とおっしゃって、門をお開けにならなかった。続けて三夜、大殿の別監が門外で徹夜したが、お后は門のその気配を知って、ついに門をお開けにならなかった。別監はお后がかくも謙譲であることを復命すると、王様はひとしお哀れに感じ、心苦しく、礼曹堂上に門を開けるようお命じになったが、お后は礼府と承旨がこのようなことをして国体をゆるがせにはならないとして、終始お受け入れにならなかった。そこで、王様は閔府に厳しい命令を下して、

「こうも頑ななのは、かえって、仁君を怨むことだ。早く門を開けよ」

とおっしゃった。閔府は恐縮して書簡をお后にさし上げ、懸命に諫めたが、終始、がえんすることなく、数日後、また二品を送って門を開けるようむなしく請われた。重臣はお后のお心を理解したが、我を張られることが今の事態に適わしくないことを説き、なお重ねて、門を開くことを請うた。お后は宮女に伝えさせた。

「わたくしごとき罪人が天恩によって生き長らえているだけでも恐れ多いのに、どうして国命を受けて頻りに人と引接することができましょう。王様の御命令が何度も下りるのがむしろ不安に思われます」

使官がねんごろに王命を受けて、再三お願いし、閔府には二度も厳命を下し、判曹の閔公がかしこまってお后に説いたので、お后はようやく外門を開けることを承知なさった。四月二十二日夜に、初めて外門だけを開けたが、草が茂り、人の背丈ほどにも伸びていたので、王命で兵を集め、草を刈って、入って行った。石段はいっぱい苔が生い、窓戸はほこりで分別できないほどで、使官は嘆息して、涙を落とした。外堂を掃除し、使官と訓事が入って来たが、荒れ果てた家が一時に繁華を取りもどしたようで、宮人たちは戸の隙間から見一喜一憂し、涙を流して喜んだ。お后はすこしも喜ぶ気配がなく、むしろ不安に感じられる風であった。

外門が開くと、閔氏の家から輦軍が無数に入って来た。門が開いたことを復命したところ、王様は尚宮四人を送って、御札を下された。お后は尚宮が来たことを知って、中門をお開けにならず、尚宮は半日のあいだ外に立ちつくしていた。その間、別監は路上にいたが、お后にしかるべく御札を見られるようにながし、閔府に対しては、困り果て、国体に対して不敬であることをこんこんと説得した。お后はやむをえず門を開けさせると、尚宮が階下から叩頭して失礼をわび、涙を流して仰ぎ見た。后はお顔があおぎめ、服の色もまったくの無色で、尚宮は悲しみに耐えられず、声を惜しまずにはげしく泣いた。お后は両眼をそらして見ぬふりをし、御札を手にとって、北を向いて四拝し、ややしばらくして開けて御覧になる。紙一面に言葉が書きつらねてあり、王様は前過を悔い、時運を悲しみ、お后が宮廷にもどられるよう請うておられた。お后は読み終って、黙然と端座したままでいらっしまった。尚宮は地に伏して、申し上げた。

「聖上がわたくしに伝旨して、必ずお後の答札を持って来いとおっしゃるので、御返書を請い申し上げます」

お后はややしばらくして嘆じておっしゃった。

「あなたはもどって、ただ罪人であるわたくしが返書をあえてさし上げることができないことを申し上げてください」

尚宮はふたたび請うことをせず、下がって、参内して王様にお目見えしてあらましを申し上げる。王は愀然と感動し、いっそう悔いて、翌日の朝、また御札を下し、衣服・衾枕、さらに食卓とをお送りになった。すべての尚宮が王命を奉じてお后のもとに出かけ、昔の思い出にいっせいに涕泣したが、お后は喜ぶこともなく、胸をつまらせるということもなく、汪汪たる波濤のような気象は天と異なることが

なかった。

尚宮が階段を上って申し上げる。

「昨日、王様におかれてはわたくしどもを引見して、『着物もふとんも枕も、そして食卓もそろっていたか』とお尋ねになりました。『何一つございませんでした』と申し上げると、王はお怒りになり、『わたしは一時の怒りにまかせて妄挙を行ったが、宮廷の者がみな後に意をはらわないのは、務めを懈怠するのと同じだ』とおっしゃり、即刻、準備をお命じになりました。ところが、内需司が、『お着物とおふとんは今にも用意させましようが、お食卓は近日の内に用意することはできません』と報告しました。そこで、王様は、『お墓まいりの際に新しく作った銀の食卓をさし上げよ』とおっしゃり、みずから探して送られました。おふとんとお枕が遅いといえば、王みずからがおふとんとお枕を新たに作るのを指図され、お枕は交換して、鳳凰の刺繍をほどきさせ、一日でお着物を作らせなさいました。チマの色が無色であることにお怒りになり、内需司を閉じ込め、美しい藍色に変えさせ、食前に急々に出させて、みずからお調べになって、お送りになりました」

そう一つ一つをことこまかに奏上して、王様の深浩なる御気持ちを語ったので、お后は感涙をおさえることができず、聞き終って、しばらく身体を伏しておっしゃった。

「天恩が極まりなく、あえてお拒みすることはできないけれど、天宮の器物を陋巷に置くことはできないにもかかわらず、なお王のおふとんとお枕、そして食卓が一時に私家へ入って来ました。これはみだりがましいことで、やはり受け取れませんので、どうかお返してください」

尚宮がお受け取りになるよう再三懇請したにもかかわらず、お聞き入れにならず、

「みだりがましいことはやめて、それぞれの分と義というものをわきまえるべきです」

と、お后はおっしゃった。尚宮はいたしかたなく、持ちもどって、復命したが、王様はお後の礼儀を立派なものとお感じになり、ふたたび御札を下し、お后のお心を慰労なかり、国体にそむいてはならないことを説いて、おっしゃった。

「これでは上を怨望し、嘲弄するもので、わたしの過失を暴こうとすることになる」

ふたたび尚宮を使わされて、尚宮に、

「お前にも罪がある」

とおっしゃった。お后は御札を御覧になって、おことわりになれない言葉であることを知って、不安に思い、

「封をしたままになさい」

とおっしゃって、答書を行うこともなさらなかった。兄弟と叔父や甥がねんごろに嘆願し、宮人たちが許しを請うて、紙を取り出し、五、六行書きしたためた。封をして尚宮に持たせ、尚宮が復命すると、王様は喜び、さっそく、お読みになったが、言葉がおだやかで、ひたすら罪を謝しておられる。王様ははなはだ感心なさって、翌二十三日はお後の誕生日であったので、御札と食膳をさし上げ、

「后への貢上物は以前のとおり行うように」

と命じなされた。お後の名誉がもとどおりにもどって来て、人民は悦服し、閔氏一門も感泣したが、お后は不安に感じ、

「罪人がどうして貢物を私宅に受け取ることができましょう」

とおっしゃり、貢物をことわり、受け取られなかった。王様が再三すすめ、宮廷中がおすすめたのに、ついにお受け取りにならなかったの、一国の臣民はお後のいさぎよい身の処し方に感服することしきりであった。

このとき、府夫人がやって来られると、お后がお仕えするさまは誠孝自若たるさままで哀れであった。

親族がみな府院内に輦で入って来た。このとき、中使が家を守り、お庭番と宮人たちが威をふるって礼節が厳正で、禁門が厳しかったので、お后が命じて、

「入って来る者を禁じなよう」

とおっしゃった。そこで初めて親族とお会いになったが、そのむつみ合いになるさまには親と疎の区別がなかった。

観象監がお後の入内の日を選んでさし上げたが、それは五月二十七日のこととなった。王様は使いをやってお後の入内を請われたが、お后はおおいに驚き、辞退して、おっしゃった。

「天恩が極まりなく、こうして天日を見ることができ、母や兄弟と会って、身内のよもやま話をするだけで感謝いたしますのに、どうして、この上、宮廷に入って、天顔を拝せましょう」

お后は固く辞讓して、贈り物もお受け取りにならなかったもので、王様は厳しい命令を閔家にお下しになり、大臣、中臣を門外に派遣して諫めさせ、御札が一日中、四度も、五度も下るといふありさまだった。お后はひそかに成り行きを思慮し、御自分の御希望通りにはならないことを理解し、ひっそりとため息をつかれ、やむをえず、礼服を召して、入内なさることになった。そのとき、閔正字の娘を八歳のときに手許に置いて今はすでに十三歳になっていたが、お後の教育を受けて、言動も立派に成長していた。お后はとても離れがたく、手を取ってお泣きになったが、閔小姐の方もやはり涙をこらえることはできない。左右の者も涙を流しながら、お二人を慰勞した。黄金で飾った色鮮やかな輦が持ち運ばれて来たが、お后はおことわりになり、

「轎子を使いましょう」

とおっしゃった。使官が、

「王意にそむくことはできません」

といて、お願いし、家の者すべてがなだめたので、やむをえず輦にお乗りになった。行列は威儀を尽くしたもので、宝玉で飾り、化粧をした子女が二人ずつ先に立ち、軍門の大將が近衛兵数千を引き連れて誇威し、大臣、中臣もともに威厳をあたりに振りながら、入内なさった。その儀が重々しく、香りが鼻をうち、光彩が燦爛として、天気ものどやかであった。恵みの風がそよそよと吹き、祥雲が空にたなびいて、ソウルの人民たちも歓喜して、仰ぎ見る者たちが道をさえぎり、昔日に一変することを思うと涙が落ちてくる。宰相や名士の夫人たちが幕によりそってのぞいて見る隙間もないほどで、それは結婚の嘉礼のときにまさるほどであった。先年、人に知られぬよう白布をかぶって往来に出て見送り、宮人やお付きの者が泣きながら後について行ったことを思うと、どうして今日のことを予測しえたらうか。これはまったく閔後の冤罪であったこととたぐいようのない徳行を慮ばかりで、天意が感動したのである。閔家では喜び、悲しみ、あるいは泣き、あるいは笑ったことであった。

王様はお后のお局と床席の器具を取りそろえ、この日は、朝から裏堂からお渡りになり、殿中にそろえた物を調べ、内人を呼んで、お尋ねになった。

「なぜ梳帖がないのか」

宮人がかしこまって、

「そこまで気が回りませんでした」

とお答えすると、王様はお腹立ちになって、

「早く、そろえよ」

とおっしゃったので、梳帖の係りの者が恐縮して、中に一そろいをとりあえず用意したが、王様が手ずから広げてみて、またお怒りになり、

「ほかのものを持ってまいれ」

とおっしゃり、また、

「梳帖の係りの者を宮中に追加せよ」

とおっしゃった。左右の者はあらためて王様の観察の行きとどいていて、お后のためをお考えになっていることに感嘆した。

お后が入内なさるとき、王様はみずから高い楼の上に昇って、万人が喜ぶのを御覧になり、お心に欣悦なさった。鳳輦が門内に入ると、お局の前に直接入らせることにし、王様は、

「欄干の上にお置きしろ」

とお命じになった。宮女が輦の前に出て、王様が前にいらっしゃるのに気がつく
と、お后は、

「罪人がどのような名目で王様にお会いできましょう」

とおっしゃって、輦の戸口にお姿をお現わしにならなかった。そこで、王様がみずから輦の戸口を開け、珠の簾をあげてお手の扇で輦の中に風を送って、引き下がられた。お后は聖恩にひたすら感じ入り、輦を降りて、欄干に伏して許しを請われたが、王様はむしろてれくさく感じて、宮女に命じ、

「お手伝いして、殿中にお入れ申せ」

とおっしゃった。宮女が一時にお手伝いしたが、あえてお部屋の席にお座りになろうとしない。つぶして、昔と今を思っ
て悲しみがこもごもこみ上げる。千山の画眉に悲しみのかげが生じ、暁星のような両の眼が玉涙にうるんで、顔色は悽然として哀願する様子がその場にも現われた。王様は一変して喜び、昔日を思っ
て、慙愧にたえない様子、左右の者もあえて拝見しないようにした。

このとき、世子は七歳に成長なさっていた。参上なさるや、お后に四拜し、膝下にお座りになった。お后がその立派に成長なさったことに胸がつまり、手を取って、撫で、むせんで、長く嘆息なさるのみであった。

王様がお后の座を近づかせ、前日の非を悔い、慰労をなさったので、お后は心に感激なさる。だが、金石といえども鏽を生じるのに、お后はすこしも傲らず、以

前と同じく柔順亭々となさっていたので、王様は今までにまして敬服なされ、左右の者たちも感嘆した。お后は宮廷におもどりなさった当初、お心が落ち着かず、何もお召し上がりにならなかった。尚宮が命令してお食事を取り寄せたところ、王様はお召し上がりになったが、お后はお召し上がりにならず、尚宮たちがすすめるのをごとわって、

「わたくしは先日来、心気が不安で、生死をさまよっていた後で、今はどうも食が進みません」

とおっしゃる。王様は驚き、みずからお茶碗をとってすすめられたので、お后は聖恩を感謝して、やむをえず受け取って、一口二口お召し上がりになったが、それでどうして氣力を付けることができたろう。

このとき、禧嬪が長い間、後の大位をけがしたものの、千万歳の榮華をわがものにするにはできず、王様が忽然と一朝に改心して、国獄をくつがえされたため、廃妃が王命を受けて即日復位し、もどって来られたのを聞いた。それはあたかも青天の霹靂が一身に落ちかかり、険しい氷崖から墜落するようであった。一天が変じたので、心に不安が生じ、おのずと大怒、大憤をおさえることができず、侍女に伝えさせた。

「今はまだわたしが後の位にあるのに、廃妃の閔氏はどうして挨拶に来ないのか。おおいに無礼であり、放恣であることはなほだしい」

宮女がこの言葉を伝えたとき、お后はあきれて聞かないふりをし、泰然となさったまま、顔色も涼やかに変えず、お答えにならなかった。王様はお后と同座していらっしゃったが、お后の御様子を見きわめて、前日のみずからの過失のまことに昏暗であったことを恥じ、張氏の放恣を痛感なさった。王様はただちに外殿に出て、命令を下し、お后を復位し、閔府院君をもとの官職におもどしになった。そしてお后の伯父の左議政が碧潼の謫所で卒したのをやはり旧の官職にもどして追贈し、その子孫を前官職でお呼びもどしになった。逆に、張氏の父は官職を剥奪し、嬪の玉冊を破却して、

「張希載を獄に下せ」

とお命じになった。宦官に、

「嬪を局からひき下し、御殿を修理せよ」

とお伝えになり、宮人と宦官が王意を伝えて、

「早く退出せよ」

と命じた。張氏はおおいに怒り、声を荒げて叱りつけた。

「わたくしこそ万民の母ではないか。世子もあるというのに、お前たちは無礼きわまりない。やむをえなければ、わたしが廃妃閔氏の礼を受けてやろう」

といって、悪態をついてやめず、世子に八つ当たりして乱打する。王様がそこに入って来て、おおいに怒り、御覧になったところ、まさに張氏が食卓をひっくり返して王様を仰ぎ見、毒悪が揺れ動いて、赤くなったり、青くなったりしながら、叫んでいる。

「わたくしは大位にあるのに、どうして廃妃は挨拶にも来ない。わたくしにどんな罪があって、下堂に降りなくてはならないのだろう」

王様はお怒りになって、おっしゃる。

「どうしてお前が挨拶を受け、位に長らえることができようか」

張氏にはわかにかに食卓を蹴飛ばし、悪態をつく。

「世子がいるのに、どうしてわたくしは位に居続けられないのでしょうか。それならそれで、閔氏の挨拶を受けてから、出て行きましょう」

食卓はひっくり返り、部屋の中はさんざんに散らかった。左右の者はその悪毒なる肝胆にあきれはて、王様も驚きあきれて、おおいに怒り、張氏をひきずって、お叱りつけになった。宮中もまた憤り、上意を汲んでかきこまり、取りおさえてかつき、すぐさまに下堂にひき降したが、そこでも張氏はおめき叫んで、お后を誹謗してやまなかった。王様は即刻、張氏を追放したかったものの、前後の事の混乱にまぎれ、また、世子のことを慮ばかって、そのままに放って置かれた。

あらためて良日を選んで威儀をととのえ、お后に坤位にお昇りになるように請われた。お后は固く辞されたが、やむをえず、衣服をととのえ、南面して、坤位にお昇りになった後、牀に降りて王様にお礼を申し上げになった。肅然として、光彩燦爛たるそのありさまは、以前に倍するほどであった。

王様は龍顔に喜気をいっばいにたたえ、手をさしのべ、いっしょに壇に昇って、席にお着きになった。他の妃、嬪、宮女たちの朝賀を受け、朝廷の一同が新たに進賀したが、なごやかな風が起こり、祥雲が玉楼をおおって、和気がただよった。宮中の誰もが喜んで歓喜の声が上がり、一国の臣民で悦服しない者はいなかった。

太長公主と明安公主が朝見して、喜んだり悲しんだりなさるのもまったくの聖上

の陰徳というべきであり、お後の聖徳をたたえ、天恩に対して感服なさるだけであった。六年の幽閉生活についてはいうまでもなく、聖上はお後の聡明な徳をほめたたえ、四、五日が過ぎた。王様は特別に命じて宮中に宴を設け、公主および貴顕を召集えられた。お后が入内された後、和気が宮中にいよいよ満ちたさまはかくのごとくであった。

王様は性格が厳かで、天威を自然と行われ、なにもいわずに察知なされて、先のことに固執して、お后が退かれたとき、ほしいままに虐待した宮人たちを配流なされた。また、逆に同情した宮人たちは昇格させ、禄を手厚く与えて、一生を閑暇に過ごすことができるようなされたので、宮女たちはみな、うらやむのであった。

お后を廃されたとき、諫争して、流した臣下については、謫所に駟馬をやって、華職をお与えになった。すでに死んでいた者には、その忠節を考えて涙を流し、霊を弔うために書院を作り、春秋にお祭りをを行うようになされた。こうして、その忠節をほめたたえて後世にその名を輝かせ、子孫たちを要職につけて俸禄を与え、父母妻子を厚く遇し、お手紙によって一門を慰勞なされた。その恩恵がかくのごとく深かったので、朝野は感嘆し、悦んだ。

禧嬪の奸悪、放恣はことに立腹なされたものの、世子の後見としての禧嬪の立場を大切に なされて、おおよその待遇はお後の次として、宮殿内の永肅宮就善堂にそのままお住まわせになった。王様の恩恵がこのようにいとも浩蕩であったから、いかに蛇蝎豺狼といえども、わが罪を反省して、感激してよきそうなものであった。ところが、張氏はおこがましくも、坤位にあって、一国がおしいただき、王様の寵愛も安泰であったのが、今や猝地に陥り、禧嬪に下ったものだから、快々として憤怒して、禍心がおおいに起こり、怨みはひとえにお后に向けられた。不遜な怨嗟と悖悪な凶心が、炎のように起こり、世子を見るごとに乱打し、世子がとうとう病に陥られたので、王は大怒し、世子を永肅宮へ行かせないようになされた。世子は時折り、

「わたしはお母さまに会うことができないの」

とおっしゃり、涙ぐまれた。王様は慰めるためにおもちゃを与え、お後の膝下に置かれ、お后がこれをおおいにお可愛がりになった。

張氏は世子の後見であることによって力を保っていたのが、今や世子の姿もなく、かつての勢いは見るかげもなくなり、同情して訪れる者とて一人もないありさ

まで、形勢まったくさびれてしまったことは、かつての閔氏よりはなほだしかった。悲しいかな、善には福が来、悪には禍が来るというのは分明で、高かった空が低くたれこめた。お后は排斥されて、一宮万民がみな同情したので、身体は疲弊しても、かえて名は光り輝いたが、張氏は排斥されて、万民がそれを楽しみ、宮中がみな爽快で、鼻先であざ笑った。そのため、張氏はいっそう口惜しく、恥ずかしくて、怨みや悪意を公然とお后に向けた。御殿の裏の築山を徘徊して耳を傾け、出入口に近いお後のいらっしゃる中宮殿の厠で楽しそうな声と繁華な慶事を聞き、閉ざされた肝胆が開くこともなかった。閔氏の一門は赫々として、王様の寵遇に会い、世間みなに祝福された。張氏の兄の張希載という人物は濟州島に流されたとして、誰も悲しまないような男であったが、痛憤して、昼も夜も火のような凶心を雲のように発していた。このような男の行く末が幸福であらうはずはない。平生、貪欲に求めた宝物を贈って宮人を味方につけ、毒薬を手に入れ、お後の食事に一服盛ろうと試みた。しかし、お后は用心深く、宮人たちを警戒し、朝夕の食事は親しい内人に作らせ、かさねがさね、病なく、乱がないようお心がけになった。そのため、宮中みながお后の教化に心服して、凶事を行う者がありそうではなかった。やむをえず、裏で呪詛と放恣を無数に行い、窮謀凶計およぼざるところがなかったが、表では張氏は恭順をよそおっていた。世子の堂々たる将来があり、お后の聖徳を頼めば、天も感心して、栄華は窮まりないものであったらうに。節度というものを知らず、自ら災をなして、大逆を謀り、その身を亡そうとは、何とも愚かしいことであった。

この年、不作であったが、王様とお后は民のことを慮ばかって、宮廷の儀式を簡素にし、食事を半減なされた。さらに命令して、救活の策を細かに行い、そのまごころが甚大であったので、感動しない臣民はなかった。

(つづく)

注 記

隣国の文学作品について、わが国ではその紹介が十分にはなされていない。この論集の場を利用して、朝鮮王朝の後宮実録小説の一つである『仁顯王后伝』を上・下二回に分けて訳出したい。この作品の詳細については拙著『後宮の物語』（丸善ライブラリー、1993年）を参照していただきたい。なお底本は李相宝校註『仁顯王后伝』（乙酉文庫）を用いた。